

# らじかる



第9号

## エマ雑感

今井順子

日本でかなり早い頃エマを読んだうちの一人は大塚金之助氏であった。同氏はエマの主著『アナキズムと他のエッセイ』が刊行された翌年に、その当時在学していた神戸高商で雑誌にエマについての論文を載せ処分をうけている。その後の同氏の運命を予告するエピソードであるが、同氏は以来エマにはほとんど関心をむけなかったようである。数年前、同氏からエマの写真（『女性解放の悲劇』のトビラと同一）を頂戴し、エマについてごく一般的なことを話しあったことがあるが、なぜか筆禍事件にふれなかったことを今では後悔している。

これに少しおくれて、新人会機関紙『デモクラシイ』の創刊号（大正8年3月6日）が「婦人解放の母 エンマ・ゴールドマンの旅」という無署名のコラムを、第2号で「女性解放の悲劇」の最後の二つのパラグラフを「婦人の歓喜」と題して訳出している（訳者不明）。主として伊藤野枝が第3次『労働運動』に訳出をつづけたのは、新人会よりもおそく、大正10年以降であるが、この第1号の「無政府主義の組織」（訳者不明）は1907年のアムステルダムのアナキスト会議の演題であり、ヒッポリト・ハーヴェルの論文からの抜粋である。思うに、大正時代にエマはバクーニン、クロポトキンについてよく知られたアナキストであったのではなからうか。

『悲劇』を読みながら気づくのは、学生時代と現在では私のエマ感に相当のちがいがあるといふことである。当時も今も私のエマへの視点は彼女の生きざま、ライフスタイルである。『マザーアース』（※）をみればわかるように、彼女には時評的な論文が多いせいもあって、エマは必ずしも深遠な思想家でも特異な理論家でも体系的な著述家でもないし、47～62頁の「アナキズム」は恰好の入門書と言えても、その域をでるものではない。にもかかわらず私がかって彼女に魅了されたのは彼女の生きざま、彼女自身の言葉を借りるなら、「人間を捉えてはなさない幽霊から人間を解放する偉大な解放者」（51頁）としての生涯であった。だが、この生涯ゆえに、今の私はエマにあまり魅かれられないのだ。（それはともかくとして、エマはもう少し読まれるべきだろう。女性解放論以外では、とくにロシア革命論が卓越しており、ウォーリン、ベルクマン、ロッカーなどとならんでアナキズムの側よりするロシア革命の現認書である。）

たしかにエマは偉大な解放者であり、闘士であったが、その物質的基盤は文筆にあり、その日常は通俗的な労働者ではなかった。生活（極論するとパン）のことをあまり意識しないですんだ学生時代には、彼女のこの生きかたはさほど気にもならなかったが、今はそうではない。自己の労働と生活という人間の原点の在り方をことのほか重要視する現在の私にはエマは遠い存在となり、その著述のみが冷ややかに私の前にある。意識は生活の反映といい切れない側面が多分にあることは十分に認めるにせよ、著述、会議、講演（『マザーアース』にはエマの講演の日程が載っていた）に明け暮れたエマと機械的な一日の継続を強制される私とでは架橋できない深淵があ

る。「運動においての彼の仕事は何んでであろうと彼は物質的に独立すべきであり、生活費は手工労働で稼ぐべきだ」(150頁)というマラテスタの主張に、私は同意する。

280~2頁にもあるように、エマは商業雑誌『ワールド』紙にボルシェヴィキ革命を分析した論文を発表したが、この行為自体が内容とは別にかなりの波紋をひき起したらしい。現在では、資本主義批判やアナキズム論文が資本主義紙や商業雑誌に掲載されるのは日常茶飯事であり、その行為が左翼の出世の手段ともなっているフシもあるが、このことの当否はここでは措くとして、今からみればあたりまえの行為はその当時は相当の反響を呼んだようである。この波紋は日本にも広がり、『前衛』(1922年11月号、1923年1月号)と『労働運動』(1922年11月号、1924年7月号)を、つまり荒畑寒村と大杉栄とをひとのみにする。

私の愛していたエマが商業出版社に抱きかかえられている姿を想像することは私に苦痛を覚えさせる。だが、もし利潤追及を最大の本旨とする商業出版社が存在しなかったならば、エマの著述の多くが私の手に届かなかったであろうことを考えると、私は複雑な気持ちにおそわれる。エンツェンスベルガーのように「積木箱」をもてあそぶのは簡単であるし、そのあそびの流行もまた資本主義の充実を立証するわけであるが、エマに即していえば、アナキストとしての赫赫たる名声や文筆家としての華麗なる成功よりも、市井の潔癖なアナキストとして生きて欲しかった、というのが今の私の感慨である。

エマはヘイマーケット事件の殉教者たちの近くに埋葬されているというが、彼女が300ドルとひきかえにブルジョア雑誌に論文を売却した行為を非難したもののなかに、これら殉教者の一人、パーソンズの未亡人が含まれていたという。歴史の皮肉というほかはない。

※『マザーアース』は『悲劇』では『大地』と訳されているが、誤訳ではないとはいえ、創刊号の巻頭論文(エマとM・バギンスキーとの共同執筆)の内容からして、『母なる地球』が正しいようである。

## いかにその借りを

### 返済するのか

西塔昌弘

以前に、「リベルテール」に「アナキズムかアナキーか」という小論を載せたことがあった。あれから全共闘運動も完全に消滅してしまい、いわゆる「アナキー」主義者は、今もどこかに棲息しているのだろうか。ただ、彼らがもはや存在しないとしても、彼らのアナキストへの問いだけは、答えるべきものとしてアナキストの中に残っている。

アナキズムは大衆に何を与えることができるのか——これが彼らの問いだった。しかし、彼らは、大衆が、あるいは彼らが自称するところの大衆としての彼らが、アナキストに何を与えることができるのか、という問いを欠落させている。そのような問いが成り立つことさえ気がつかなかった。おそらく、それは彼らが、あるいは大衆が、今だに真に自立していないことによるのだろう。しかし、それとは別に彼らの問いは過去のアナキストの大衆への大言壮語と自分自身への幻想による借金の、債権者である大衆による借金とりたてでもあるのだ。

大衆がアナキストに何も与えてくれないように、アナキストも大衆に何も与えられないだろう。権力無き社会——アナキーは、大衆にとって時たまふつと魅力を感じるかもしれないが、決して居心地のいい社会ではないということをアナキストは素直に認めるべきである。それ故、我々にとって問題なのは、19世紀アナキズムの理論的、実践的破産ではなくて、その自己幻想だ。

大衆が依然として権力主義から抜け出せないままにいることを見るなら、アナキストにとって、アナキズムが理論的にも実践的にも大衆の間で破産したにもかかわらず、我々がアナキズムに魅かれたということの方が重要である。そこにこそ、我々は自己の反権力性の結晶核を見つけ出すべきなのだ。

これからのアナキズム運動の目的は、権力無き社会を真に求める人格である。その人格と人格が織りなす、一つのアナキスト社会であり、他の社会との共存である。すなわち、これからのアナキストは、反全体主義的エゴイストに他ならない。

アナキストが以上の立場を明確にしていくとき、「アナキー」主義者の真の自立と、彼らとの連合が確立されるだろう。すなわち、現在のアナキズムの思想運動の方針は、アナキズムへの趣味的発言や、政治主義的理論の討論がなされるのではなく、各人の思想性が語られるサロンであり、開かれた共同体ではなく、無政府共産主義によって支えられた、閉じた共同体の建設である。

## エマとウーマンリブ (6)

はしもと・よしはる

### ルソーの意見

(4)母親に共通な愛着や世話が、否単なる習慣によって、若し子供達の憎悪をかきたてなければ子供達によって愛される女となる。母親として彼女が制限を加えてもそれがよい方向にあるなら子供の愛情は失われるどころか増すのである。というのは依存こそ女性の自然な状態であり、女性に従順であるよう作られているのを知っている。…同じ理由で女性には自由をほとんど持たないかまたは持つべきではないのである。女性

### メアリーの意見

(4)これは従属が個人にとどまらないで子孫にまで続くというようです。……奴隷と暴徒はひと度、権威から解き放されると、いつでも同じく極端に溺れます。強く押えていた手を突然放すと曲げた弓は力を得てはねかえるのです。それ故外的条件に委ねられている感受性は権威に従属するか、理性によって柔わらげられなければならないのです。

(5)さように不完全な存在としての男性と一緒に生活するよう形づくられている女性は、オ

は許されたものに溺れやすい、何事につけ極端に陥り、男の児より慰戯にふけりやすい。

(5)女性における第一級的美質は、よい性質とやさしい気質である。これは時に悪徳に充ち、常に欠点の多い男という不完全な人間に尽すことで形づくられる。女は時には不正に堪え、夫の侮辱にも不平を言わずに辛棒するのを学ばなければならない。それは夫の為ではなく自分の為である。…女のよ

能を働かせて堪え忍ぶ必要があるのを学ばなければならない。けど人間の聖なる権利は盲目的な従順を強いることで犯されるのです。

それとも聖なる権利は男性にだけあるのでしょうか。不正を堪え、侮辱を黙って辛棒する人は、すぐ不正で善悪の区別がつかなくなる。私はそれを否定するだけでなく、それが気質を形づくるとか温和になる方法ではないとします。…男性は頭も心も利得を追うことで一杯です。頭を使うことが心に健全な節制を与えるのです。…節制は理性の冷静な働きによってできる。私はおとなしく無知なひとで温和なひととは知らない。…感じやすい男性なら、そうしたおとなしくいらだちやすい女は、やっかいな伴侶だと思ってしまう。

つづく

## “性とアナキズム”

小川正夫著

50年代といえは確しかチャタレー裁判があったD.H.ローレンスの明きらかにした暗い性が問題になった。その状況を踏まえて書かれたと思われる小川氏の一連のエッセイは、アナキズムに“性”を持込んだことでユニークだと言えよう。というのは、わが日本のア

近刊「アーサー・モイゼ風刺画集」

—狂乱の花開き  
邪悪で戦慄すべき  
抱腹絶倒  
美しくも怖るべき  
花園の世界—

彼の画集（A4版23頁 ¥800 250部  
限定版）を出版します。民衆の中で生ま  
れた画の一枚一枚は粗野でわい雑、にぎ  
にぎしくて凡そせん細からは遠いもので  
すが、ユーモアに溢れ、鋭い素描と作者  
の優さしい心使いがみられます。

既刊「女性解放の悲劇」

エマ・ゴールドマン著

バークマンの限りなく悲惨な独房の生活  
に「自由への夢」を力強くあたえ続けた  
エマの愛情に読者は強い感動をうけるで

あろう。この本を読むことによってエマ  
のアナキストとしての全人格を知ること  
ができる。 定価送料共¥750

ナーキズム運動では一般に禁欲主義が主調音  
で、従って非政治的な政治活動、労働運動、  
テロリズムへの傾斜等が歴史の地平を行き通  
い、“性”は個人的に処理されてきた。これは  
氏のあげている通り、ブルードン、クロボト  
キン、ランドワアも同じである。けれど内面  
に立入るなら、彼等の“性”はキリスト教に  
縛りつけられていたとか、ルソーと同じくブ  
ルードンもローマ人の家父長制の支奉者で、  
妻君を家政婦ぐらいにしか考えていなかった  
とするのは誤りである。ブルードン風と言え  
ば“私の情熱の発露がどこに向けられている  
か”理解して欲しいとのことである。むろん  
小川氏はかように語ってはいない。氏はW・  
ライヒに依っていながら、今日の人のように  
夫婦関係を支配と従属とみとめ、これにマル  
クス流の性の経済学説を援用することもしな  
い。氏がそうした誤謬から免れたのはプリミ  
ティブなものへの愛好によるのだろう。氏に  
とってアナーキズムは原始共産制を保持した  
部族生活を凝視しながら、現代に適應する何  
かを探求することであった。ここではアナー

キズムの単純な先祖帰りだとか牧歌風だとか  
は除外されている。更に特異な視点はアナー  
キズムとは、負数のポテンシャルを重ねる  
ことであった。ジャンジュネが方法として、  
泥棒、男色…を経過しながら自由を獲得した  
のに学べといわれる。氏のアナーキズムへの  
貢献は、未だ不十分ながら実存主義の方面か  
らのアプローチの可能性を示唆しているところ  
にある。だからこの本の註に散見する大会  
での他の人びとの意見のように表向きは極め  
てアナーキズムのイデオログの発言であり  
ながら、内実は何処へ連れて行くのか判ら  
ない迷路案内者と異り、氏には独自の柔軟な対  
応性があった。

アナーキストは氏好みの句によれば、〈雨夜  
の星〉である。そのところは〈雨が止まねば  
（死んでみなければ）星（アナーキスト）は  
見えない。

—はしもと・よしはる—

発行所 名古屋市昭和区小坂町2-16  
小川正夫遺稿集刊行会